

# 新しもの好きの ネットワークを広げ、 イノベーター 農業を楽しむ革新者



## 新しもの好きのネットワークを広げ、農業を楽しむ革新者

全国のセブーン・イレブンの店舗に並ぶポテトサラダ。その原料となるジャガイモの生産者の一人が細川幹生だ。Facebookを通じて農場の様子を発信することで、他県の店舗スタッフと交流を深め、お客さんに自らポテトサラダをPRするのに一役買っている。新しもの好きは類が友を呼ぶがごとく、情報をつないでいくようだ。農業者同士に限らず、広がる人脈が心の糧に農業をいかに楽しむか。その秘密をひも解いてみたい。

文／加藤祐子、写真／細川幹生

## コンビニのポテトサラダを農家が熱心に宣伝する理由

全国に展開しているコンビニエンスストア、セブーン・イレブンの棚に並んでいるポテトサラダ。今回の主人公はその原料となるジャガイモの生産者のひとり、(有)ほそかわ農場の細川幹生だ。北海道のジャガイモ農家が、Facebook等でセブーン・イレブンのポテトサラダを宣伝する。一般的には「生産して出荷すれば終わり」という発想がいまだに大勢を占めるオホーツクの畑作農家の中には、異色の存在である。

ポテトサラダの製造元は、静岡県に本社を構える(株)ヤマザキだ。同社は、セブーン・イレブンのジャパンの井坂隆一前社長が営業マンだった頃より、一心同体で商品開発を進めてきた。ポテトサラダは真空パックに梱包した形で、プライベートブランドの「セブンプレミアム」の商品として好評を博すことになる。静岡県内の工場では生産が追い付かなくな

り、新たな生産拠点を北海道へという話を持ち上がった。原料の輸送を簡便に進めるためである。青果流通業を営んでいた細川の弟、靖夫氏が新工場の立ち上げに際してコーディネートを担当したことが、ご縁の始まりとなった。

新工場の1日当たりの処理量は約20t。数ある産地のなかからジャガイモの栽培により適した地域のものを使いたいという同社の意向から、名寄やオホーツクエリアに声がかかったのだ。細川を中心に北海道津別町の5軒の農家で、工場で加工処理される約2カ月分に相当する1200tのジャガイモを納入している。そのうち、細川が生産しているのは約700t、1.5t載せられる金属製のコンテナに換算すると約450基に相当する。

春の圃場づくりから植え付け、最後の収穫作業までの風景を写真に撮り、細川はFacebookで農場の様子を発信している。一般的には、どのようにジャガイモがつくられるの

か、そこに興味を抱く人はそう多くはないかもしれない。しかし、「北海道」に幻想を抱く府県の人々にとっては、ポテトサラダから細川の写真にたどり着いた人もいる。日々更新される写真を楽しみに思うファンができたこと、そのつながり自体に細川は生産活動だけでは得られないおもしろさを感じている。

## 父から譲り受けた新しもの好きの血

さて、ここで改めて紹介しよう。細川は津別町でジャガイモのほか、小麦、大豆、小豆を生産している。北海道の東北部に位置するオホーツクエリアに位置する津別町は、人口5000人ほどの農林業が盛んな町である。現在のほそかわ農場の経営面積は約62haだが、この面積は就農して以来、約30年間変わっていない。このことを消極的に捉えれば、細川自身がこの面積で満足できたということになるが、1人で農作業をこなすという条件では、無理に増やす必要もなかったのだ。

「儲けたいとか、規模を拡大したいといったギラギラした農業はしていません。誰かを蹴落としたり、勝ち負けを考えたりするのが好きではないので。それよりもGPSガイドンスを使い始めたら、おもしろそうだ

有限会社ほそかわ農場 代表取締役

**細川幹生** 北海道津別町

ほそかわ・みきお 1965年北海道津別町生まれ。高校卒業後、北海道拓殖短期大学に進学。米国カリフォルニア州のイチゴ農園で1年間、同サンディエゴ州チノ農場(有機野菜)で2カ月間の研修を経て実家の農業に就く。29歳で経営委譲を受け、現在に至る。

経営面積：約62ha(ジャガイモ23ha、小麦(きたほなみ、ゆめちから)19ha、大豆15ha、小豆5ha)

ねと仲間が増えていく。冬にスノーシューを始めたときもそうでした。その感覚が楽しいですよ」

新しもの好きを自負する細川らしい、生き方のスタンスである。楽しいこと、おもしろそうなことには積極的に取り組む代わりに飽きっぽいという性格は、父譲りだと笑う。トラクターが出回ると早々に導入し、30年前に60haを超える面積にまで拡大し、それに見合う装備を拡充していたのだから、父の背中を見て育つとはこういうことなのだろう。

経歴を尋ねてみると、将来、農業経営を引き継ぐつもりだったことがうかがえる。地元の高校を卒業した後、進学したのは道内の農業系の短大だ。さらに短大を卒業すると、1年間米国カリフォルニア州のイチゴ農家へ研修に出かけている。研修を終えて一度帰国し、実家の農業を手伝ったものの、3年後に再び渡米。今度は、サンディエゴ州で有機野菜を手がけるチノ農場にたどり着く。そこで2カ月働き、1カ月ほどの放浪の旅を経て帰国し、父の手伝いをしながら農業に従事することになる。22歳の頃のことである。

父はいずれの場面でも、比較的やりたいことをやらせてくれたそうだ。なかなか経営委譲をしない「親父」の存在に悩まされる話をよく耳

にするが、細川家は事情が違った。細川が29歳になった頃、経営を託されることになる。農作業には慣れていたものの、経営となると別問題である。オペレーターとして手を貸し、親子関係は良好なほうだが、若くして経営を任された後は近隣の先輩農家に助けを借りた。

「農業は100%を毎年どうやって維持していくことが難しいから、90%、80%になるなんて、簡単にあることだから」

冬には辺り一面に雪が積もり、氷点下20度以下に冷え込む。畑での農作業ができるのは4月から11月までの8カ月間に限られる。天候に左右されることも織り込み済みだ。そのなかでは現状維持に甘んじるというよりは、100%を維持するための策を常に考えているという捉え方のほうが的確だろう。この考え方が、一般的な産業との違いだという。

### 新しい技術は「便利な道具」!?

じつは今回の取材で細川に聞いてみたいことがあった。それは、昨今の農業ICTについてどう考えているのかという問いである。現在、急速に普及しているカラー画面のついたGPSガイダンスだが、この初期モデルを直輸入して使い始めた、その人であるからだ。



1 植え付け前は、フロントに砕土・鎮圧作業機、リアにパワーハローのコンビ作業で効率よく行なう。フェントのトラクターは操作性に優れるので良き相棒だ 2 ジャガイモの培土作業。GPSガイダンスと自動操舵装置を活用して、変形圃場でも円弧を描くように美しい畦づくりができる 3 トラクターの内部に装着したGPSガイダンスの画面。傾斜圃場が多く、高低差が色の違いで表示されている 4 トラクター後方につけたカメラの画像も同じ画面で映し出せる。肥料の残量確認に便利 5 夜間はLEDの作業灯をつけて、GPSガイダンスを活用している

新しもの好きのネットワークを広げ、農業を楽しむ革新者



6 ジャガイモの地下部。Facebookを見ている読者にもジャガイモの成長過程がわかる 7 大豆の芽吹き。どの作物からも四季の移ろいが伝わる 8 登熟前の秋播き小麦「ゆめちから」の穂 9 数年にわたり定点撮影をしている圃場。輪作により、昨年は小麦、今年はジャガイモが植え付けられている 10 40年間連作している小麦圃場。土づくりに熱心に取り組み、均一につくることを心がけている

GPSガイドダンスの初期モデルはLEDランプが並んだ仕様で、走行する予定のラインからずれた分だけ左右のLEDランプが点灯した。これでは使い勝手が悪いと思い、インターネットで海外の情報を調べてみると、ライトバーの下に小さな画面がついたバージョンが米国でリリースされたことを知る。さらに1〜2年待っていると、カラー画面のバージョンが登場した。そこで、為替レートが1ドル80円台だったことに後押しされ、友人の分と合わせて2台個人で輸入を試みることになる。

手元に届くと、さっそくプラグを買ってきてハンダ付けして、トラクターからの車速を取り出す電線とつないだ。以前に使っていたハーディーの自動散布装置の知識が活かされたという。メーカーに依頼すると5万〜10万円もする配線を買うことになったと後で聞いて驚いたそう。

バージョンやGPSの精度の違うものをいろいろ試行錯誤して、現在は、圃場づくりの砕土整地作業や畦立て作業、防除作業をはじめ、夜間作業でも活用している。GPSガイドダンスの画面と、後方を確認するために取り付けたカメラ画像を切り替えるなど、最新技術をスマートに作業に採り入れている。

これは一例に過ぎないが、当時も

いまも、感じていることは変わらないようだ。先の問いかけにまずこう答えてくれた。

「ICTと呼ばれることに違和感を感じる……。やっとな名前がついたわけなんだね」

確かに、最近では、個別の機械やシステムにはそれぞれ名称があるが、センサーや制御技術、通信技術を駆使した新技術をまとめた総称のように扱われている。そして、細川はさらに続けた。

「多くの人が、パッケージでそろえようとするんですよね。僕は、買ってきたものをいじることのほうが楽しいけれど、いじり方を知らないというか……」

同感だ。本来なら誰でも少し知識を身に付けられべきことだが、売ろうとする側も手離れの良いパッケージで用意し、使う側もフルスペックのものを求める。そういう傾向が見られるのである。

細川は、比較的小規模なコンピュターにも親しんでいたため、データベースを組んで土壌情報を入力したり、そこに写真データをリンクしたり、いろいろとトライしてみたという。いまでは圃場管理システムと呼ばれる類のものだ。しかし、62haで圃場枚数は23枚。それも、いずれも自作地で借地はない。入力の手間を考える

と、作業中にそこまで対応する必要はないという結論に至ったという。「ガチガチに組まれたものじゃないほうが融通の利く管理ができるのではないか。いずれにしても、新しい技術が『便利な道具』になるかどうかは、使う側がどれだけ使いこなせるか次第だと思うんです」

使わなくなる技術もあれば、そのまま作業の基軸になる技術もある。いまでも、その取捨選択を継続的に繰り返している。

## 人がつながることで、世界観が広がる

もう一つ、細川の世界観を広げたツールがある。それはいまや情報ツールとして欠かせなくなったSNS（ソーシャルネットワークサービス）である。

きっかけは「僕らの農業」というSNSだった。写真を載せてコメントのやり取りができる仕組みで、北海道内の農業者を中心に人脈が広がった。農家は作業中、ハンドルを握ってはいるけれど、意外と自由な時間がある。外部の情報を取る手段が携帯電話からスマートフォンに移行するなかで、フィットした。

興味深いのは、新しもの好き、知りたがり屋が集まってきたことだ。情報を集めようとしている人たち

とは気が合った。最初は農業の使い方など単発の質問のやり取りだったが、気が知れてくると、話題は多様なものになっていった。さらにFacebookに移行すると、人脈の幅はさらに広がった。

冒頭のポテトサラダの件でも、一役買っている。細川は千葉を訪れた際に、Facebookで交流していた店舗を訪ねたのだ。この店舗ではわざわざポテトサラダの棚に独自のPOPを作成して販売していた。直接取引関係にないからこそ奇跡的な対面だった。多くの人がFacebookを通じてこの交流を称賛したことからも、話題性があった。後日、その店長さんは息子を連れて千葉から津別を訪ねてくれたと細川は喜んでた。

こうした交流は、セブン・イレブン・ジャパンの井坂氏の耳にも入り、旭川工場の竣工の際には、今後大いに交流を続けてほしいといわれたそう。コンビニエンスストアの店員からすれば雲の上の存在で、彼らの努力が認められたことにもなる。

もちろん、こういったPRは誰かに頼まれたわけではない。儲けにはつながらないが、お客様と交流できるという機会をつくれたことで、生産意欲の向上につながるという。

農業経営はビジネス化すればするほど、こうした心を満たす活動が必



13 セブン・イレブンのプライベートブランド「セブンプレミアム」のポテトサラダ



12 ヤマザキの独自ブランドのポテトサラダ



11 北海道男爵いものポテトサラダ



14

14 細川いわく、SNSで発信するようになり、農場で撮影スポットを探すことが楽しみになったという

# 新しもの好きのネットワークを広げ、農業を楽しむ革新者



15 短大卒業後、渡米した研修先で（左から3人目が細川）  
 16 ジャガイモのハーベスター操作はいまでも父、恵市さんが手伝っている  
 17 昨年、長男・源生さんが就農し、緑肥の粉碎と鋤き込みが2台体制で行なえるようになった。フェントトラクターも2台体制だ  
 18 農作業を頑張るのは、冬の4カ月間を遊ぶためという。昨冬はスノーシューを履いて畑の周りをよく散策した



## 息子にどう受け渡していくか 試行錯誤する新たな課題

要になるのではないだろうか。人間の血液循環に動脈と静脈があるように、勢いよく経済を動かす実業を動脈と考えると、静脈に例えられる心を満たす活動があることでうまく循環する。

どの分野にも「革新者（イノベーター）」と呼ばれる人はいる。米国の社会学者エベレット・M・ロジャースが提唱した、イノベーター理論は、顧客の新商品を購入する態度を早く購入した順に5つに分類する考え方だ。細川は最初に購入に踏み切る「イノベーター」であろう。初期に関心を示すのは、全体の数%に過ぎない限られた人たちだけである。

「機械が好きだろうと言われるけれど、そうでもないんだよね」  
 細川は純粹に新しい技術に触れたら、自らの仕事に、あるいは暮らしに役立つかを考えてみる。おもしろそうだと思うたら、日本製であろうと外国製であろうと関係ない。手に入るのかを考えて、手段を講じる。素直にそのことを実行して、楽しんでいただけなのだ。

数年前に津別町では離農者が続いた。同世代の経営者が経営不振に陥り、過剰投資だったのか、経営を継

続できなくなった姿を見るのは心苦しく、寂しかったという。改めて、これからの見通しを尋ねてみた。

まず、大きく変わったのは、昨年からは長男・源生が農業に携わるようになったことだ。自動車の運転にも不慣れな彼に、作業のイロハを教えながら、父として、社長として試行錯誤をしている。仕事を覚えるなかで、どう受け渡していくのか、これまでになかった課題である。源生は昨年の秋作業を終えると渡米し、かつて父が研修で訪れたチノ農場で約3カ月を過ごした。異国の地で経験したことを胸に、心機一転2年目に挑んでいる。

もう一つの変化は地域の守り方だ。「これから5年後、10年後に周りの人がリタイヤするなかで、土地が増えるようだったら対応しようと思いません。そのために機械の準備をしているつもりではいるんだけど。いきなりはできないからね。フェントのトラクターも2台になったしね」

冬場の4カ月間に遊ぶように、春から秋までは農作業に頭を悩ます。津別の風土に密着した暮らしを豊かだと思ひ、愛着を感じるからこそ、自らのセンスで楽しんでいきたい。細川は写真などを通じてそれを伝え、息子にはその背中を見せているように思う。  
 （文中敬称略）